

崔書勉先生と私 『身元保証人』

日韓談話室代表世話人 橋本 明

彼の生まれ故郷、江原道原州を見てきた。Wonju ウオンジュという。極寒の師走半ば、低地の山々は雪に埋れ冷たい風が襟元から遠慮なく入り込む。目下のところ、市の目標は企業、住宅などを誘致するため更地になった百八十万坪の土地を開発することだ。整地後の七割ほどが既に売却気味。一区画二万五千坪ほどがポツンポツンと残っている。

時速一四〇キロでソウルからぶつとばして二時間半。近くに二〇十九年冬季オリンピック会場があり、交通の便は飛躍的に向上する。

羽田を飛び立った頃崔さんは東京に出かけていた。一七日帰国してすぐさぬき倶楽部を訪れ一階の部屋で会ったのだが、冬のウオンジュには何もなく、つまらない街だと一蹴されたものだ。

ともかく日本は暖かく豊かで過ごしやすい。「ソウルに帰るのが嫌だよ」とつぶやいた崔さんの気持ちはよく理解できた。

初めて日本の土を踏んだとき迎えにきていたカトリックの大物もとつくと亡くなっており、ほとんど一人ぼっちになった崔さんは無性に寂しくてたまらない。故郷の同級生も二人くらいしかのこっておらず、まして来日当時世話になった日本人は鬼籍に移ってしまった。「私が一人生きていけるようなものだ」と述懐するのだが、寂しさを国会図書館、狸穴の外務省外交史料館に行つて勉強する姿が最近の崔さんの日常だ。

聖心女学院長マダム・キオの墓参りをきっかけに崔さんは滞日六〇年の行事を黄泉の世界巡りに当てる意向だ。

キオさんに言われるまま、崔青年は一九五七年最高裁判官田中耕太郎に会う。

「私は法の番人だ。日本に密航した罪人からいくらヴァチカンにいかせてくれと言われても、再度罪を犯させるわけにはいかない。むしろ君は日本に留まり、私たちに韓国情勢を伝えるなど教える立場にあるのではないか。思いとどまって日本に腰をすえるなら私が君の保証人になってやるよ」

そう言ってくれた田中耕太郎は私がついて行ってやる、と、その足で入管局長部屋に出向く。局長はまずどこに上陸したのか質問した。

「それは言えない。私を権力者の魔手から逃れさせてくれた韓国の要人に迷惑をかけることになる。出来ない、言えない」
ごねる局長と渡り合う様子を長官は黙って眺めるだけだ。ついに局長の方が折れた。飛行機で張勉氏の手配に身を預けながら渡来したのだが、崔さんはついに口を割らなかつた。

滞在が長期に亘ったところ、入管局長が崔書勉を訪ねてきたことがある。分厚い書類をかざすようにして、ここそこに記入すればもう七面倒臭い滞在許可証申請手続きから解放されますよ、という。崔さんは声を張り上げた。

「待ってくれ。私は自分が好んで日本にきたわけではない。故郷を捨てざるを得なかつたからこうして日本にいる。永住権を得るためにこの国を訪れたのではない。面倒と思うのは君の勝手だが、私は規定道理に滞在許可証を申請して過ごす」
ほとんど怒鳴り上げた。

筆者は崔さんに美学を見る。私が一人残ろうと、彼には日韓談話室があり、後輩や慕う人々を沢山抱えている。まだまだ生きていたただかねばならない人物なのだ。

昨年（二〇一六）私は崔さんに乞われて身元保証人になった。田中耕太郎に比べるとあまりにお粗末な人間だが、これも生きのこっている身の一つの仕事なのであろう。さて、彼のお墓はどこにあったつけ。





